海軍・京都学派・世界史（00・11・20）

岸田達也（昭17・9文乙）

「世界史的立場と日本」

本日は「海軍・京都学派・世界史」という三題噺で、これを一つにつなげて昭和史の一こまを話してまいりたいと思います。本日の話の中心は、太平洋戦争開戦直後に発売された『中央公論』昭和一七年新年号に掲載され、当時非常な反響を呼んだ座談会「世界史的立場と日本」およびその背景であります。

この座談会はいわゆる京都学派の四人の学者によってなされたものであります。すなわち高坂正顕（こうさかまさあき）、哲学専攻で当時京大教授でありました。西谷啓治（にしたにけいじ）、宗教学で当時京大助教授でありました。高山岩男（こうやま）、哲学専攻で当時京大助教授であります。鈴木成高（しげたか）、これは西洋史で当時三高教授でありました。四人のうち最年少の三四才で、昭和一七年九月に京大助教授になりました。ちなみに鈴木さんが最年少三四才と言いましたが、これ皆若いのです。

高山さんが三五才、それから高坂正顕、西谷啓治ともに四一才でありますから、ようやく三〇代の半ばを迎え、そして四〇代に入ったという当時の京大の若手の第一線でありました。この四名によって、開戦直前の一一月二六日夜、京都円山「左阿弥」においてなされたものでありますが、掲載された『中央公論』新年号が発売されたのは一二月一九日、すなわち一二月八日の開戦直後でありました。私はちょうど三高の文乙二年で、鈴木さんの西洋史の講義を聴いておりました。

その後この四名による座談会は、『中央公論』に二度にわたり掲載されました。第二回の座談会は「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」と題して昭和一七年四月号に、第三回の座談会は「総力戦の哲学」と題して昭和一八年新年号にそれぞれ掲載されたのち、これら三回にわたる座談会は、昭和一八年三月、最初の座談会の表題「世界史的立場と日本」のもとに合本され、単行本として刊行されました。持ってきましたのは、これは奥付ですけれども、『世界史的立場と日本』の単行本、昭和一八年三月の初版のものです。初版一万五千部はたちまち売り尽くされ、再版もすぐに売り切れまして、大きな反響を呼びました。当時東大西洋史に進学して、やがて「学徒出陣」に巻き込まれた私には、この書がその後の戦時下において、後で述べますように陸軍および右翼から激しい攻撃を受けるにいたったことは、そのとき知る由もなかったのであります。昭和二一年三月台湾軍から復員した私

がやがて知ったことは、これらの座談会を行なった京都学派の四名は、ＧＨＱの「公職追放」および「教職追放」指令で京大を退職したということでありました。

しかしこの追放は昭和二五年の一〇月以降次々と解除されまして、高坂、西谷両教授は京大に復帰しました。ただし、高坂さんは教育学部で学部は変わり、西谷さんはまたもとの宗教学の方に帰りました。高山教授は日本大学など多くの大学を転々としました。また鈴木成高さんは昭和二九年早稲田大学教授に就任し、それぞれ大学に復職いたしました。私は、ちょうど鈴木さんが早稲田大学に就任したころから名古屋大学に在職し、専門がドイツ史学思想史でありましたから度々会う折がありました。しかしその間、会えば必ず学問の話でありました。それは名古屋大学で中山治一さんと会うときも同様でありました。従いまして『中央公論』の座談会にかかわる事情は、今となっては聞いておけばよかったと思いますけれども、一切直接聞いたことはありません。三高当時においても、鈴木さんから聞いたことはありませんでした。また京都学派のほかの三名も、座談会にかかわる事情については沈黙のままでありました。

「大島メモ」

ところが戦後二〇年経った昭和四〇年、この座談会に関する目撃者の貴重な証言が公表

されました。私はそれで初めてこの意外な事情を知りました。それが『中央公論』昭和四〇年八月号に掲載された、大島康正東京教育大学教授の「大東亜戦争と京都学派」であります。これは「ある歴史への証言」とありますが、目撃者の貴重な証言でありまして、そこで大島さんは「今日まで隠されてきた歴史の証言」をしておきたいというのであります。

それは、あの座談会の背景には、海軍の米内光政系の海軍省調査課長高木惣吉大佐と京都学派とのひそかな結びつきがあったということであります。大島さんは昭和一五年三月に京大文学部の哲学専攻を卒業して、四月から文学部の副手となりました（昭和二三～二四、三高哲学講師）。大島さんの回想によりますと、昭和一六年一一月のあの座談会の半年前、海軍省調査課からの依頼、すなわちアメリカと戦って勝てる見通しは海軍にはない、戦争防止のために協力してほしいという依頼に応じて、京都の哲学に一つの秘密の組織が生まれたというのであります。表面は高山岩男一人だけが海軍省の嘱託になることになり、文学部教授会で承認されましたが、同時に高坂、西谷、また鈴木成高―鈴木さんは西洋史専攻でありますが、哲学に対する関心が深くて西田さん、田辺さんのところにはよく出入りしておりました―これらの人々、この他にもおりますけれども、それらの人々が内々で協力するということになり、大島さんがひそかにその事務をさせられることになったのであります。つまり大島さんは京都学派の裏方を務めた目撃者であります。

大島さんの仕事は、月に一・二回京都の料亭を転々としながら行なわれた秘密の会合の場所を設営すること、日時を皆に連絡すること、会合での皆の意見をメモ・ノートにし、その内容を整理し清書して、海軍省調査課にそのつど発送することでありました。これで大島さんは海軍から月々三〇円の手当をもらったわけであります。副手の月給は二〇円であります。当時、サラリーマンの初任給が最低七〇円でありますから、大学の副手というのがいかに安い月給であるかということがおわかりだろうと思います。この会合には、田辺元さんも体の調子がよいときにはたまに出ることもあり、グループ以外の人、たとえば湯川秀樹さんを招くこともありましたし、また、谷川徹三さんが東京から来て加わったこともあったということであります。大島さんは当時のメモ・ノートを保存していると言っておりますが、すでに亡くなられておりますので、私はその所在を今のところ確かめておりません。

大島さんは、保存している当時のメモ・ノートを大きく分けると、次の三つに区分されると言っております。会合のごく始めのころはいかにして戦争を阻止するかがテーマであったが、これはもはや間に合わなかった。それ以後昭和一九年の秋ごろまでは、いかにして陸軍に道義的責任感を感じさせ、理性的に納得させながら戦争を速やかに終結させるかが、基本のテーマであった。東条内閣打倒の方策を論じているわけであります。東条内閣

は昭和一九年七月一八日に総辞職いたしました。七月二二日に小磯・米内協力内閣ができまして、海軍大臣米内、軍令部総長及川、海軍次官井上、高木大佐はこの米内光政、井上成美の系統で、当時は少将で海軍省教育局長でありました。

昭和一九年の暮れから昭和二〇年敗戦直前までは、戦後処理の問題が議論の中心であったということであります。ちょうどこの時期には敗戦は歴然としておりまして、一九年六月一九日マリアナ沖海戦、これがまず大きな転回点で、これ以後は希望なき戦争となっているわけであります。『高松宮日記』（中央公論社）というのが最近全八巻で出ていまして、私は全部読みました。高松宮は開戦以来、軍令部第一部（作戦）におりましたから、日記の中に非常に詳細な戦況を記録しておりますが、読んでいて注目すべきことは、マリアナ沖海戦のあった六月下旬の日記に「戦況記録ヲ止メル」と記され、それまで詳しく書かれていた戦況は、そこで全く書かれなくなります。後で若干大きなときには書かれておりますけれども、このことが海軍のマリアナ沖海戦に対する判断をよく表わしていると思います。七月七日にはサイパン玉砕、一〇月二〇日には米軍のレイテ上陸、私はちょうどそのころ台湾軍におり、一〇月一二日の台湾大空襲を体験しました。レイテ上陸でレイテ沖海戦一〇月二四日、これによってほぼ連合艦隊壊滅でありますから、これ以後はもはや絶望といっていい状態であります。そういうわけで、末期、この第三期は要するに戦後処理の

問題が議論の中心であったというのが、大島さんのメモ・ノートの要約であります。

以上の大島さんの証言で明らかになったことは、戦後いわゆる進歩的知識人や左翼陣営から批判された京都学派の戦争協力というものは、海軍の一部の人々への協力ではありましたが、陸軍への協力ではなかったということであります。まずは戦争の防止、それが不可能になってからは、戦争の速やかな終結のための協力でありました。しかし、それは、結局は実を結ばない協力でありまして、戦時の現実の前には敗北せざるを得なかったわけであります。

陸軍への協力でなかったということがいろいろな問題を生じさせました。大島さんが言うところによると、まず第一に陸軍に気づかれないために、秘密の会合での発言が『中央公論』に活字として発表される場合には、会合で始終議論されていた東条批判、陸軍批判はすっかり影をひそめているというのであります。東条批判、陸軍批判がすっかり影をひそめておりますので、その点がまた、当時京都学派が全面的に戦争に協力したという印象を人々に与えたものと思われます。しかし、やはり陸軍からは憎まれて戦争末期にはさまざまな圧迫を受けるようになりました。そのことはまた後で述べます。

海軍のブレーントラスト

この大島さんの「大東亜戦争と京都学派」が昭和四〇年八月号の『中央公論』に発表されると、それに触発されて、同年一〇月号の雑誌『心』に「大東亜戦争と日本の知識人たち—京都学派・和辻哲郎」と題する座談会をはじめとしまして、四回にわたり「大東亜戦争と日本の知識人たち」について座談会の記録が発表されました。それから昭和四一年二月号の雑誌『自由』には「終戦と知識人の動向」と題する座談会が掲載され、それぞれ大島さんの一文を取り上げていて興味があります。この「終戦と知識人の動向」という『自由』の座談会は、私からすれば極めて珍しい座談会でありまして、これに鈴木成高、中山治一、林健太郎、竹山道雄さん他が出席しておりますけれども、鈴木さんと中山さんとそして林さんが同席しているというのはまずこの座談会だけでありましょう。鈴木さんと林さんはよく座談会に出ますけれども、三人が同席しているというのは非常に珍しい。おそらく唯一の座談会といってよいものであります。

そのようにしまして、この大島さんの一文を受けて『心』また『自由』に座談会が掲載されましたが、ここではこの大島さんの一文を受け、当時の海軍省調査課長であった高木惣吉さんが長年の沈黙を破って、昭和四二年七月初版刊行の『太平洋戦争と陸海軍の抗

争』の中で初めて公表した、高木さんが編成した海軍のブレーントラスト、これについて以下述べておきたいと思います。

京都学派もこのブレーンと関係するものでありました。高木惣吉が海軍のブレーントラストを考えるにいたった直接の動機は何であったか、それは高木自身が言うところによると次のとおりであります。昭和一三年一一月二五日の夜、場所は芝の水交社で、陸海軍の軍務局の中堅層が両方とも六名ずつ、佐官クラスの幕僚の意見交換の会合が行なわれ、当時調査課長の高木大佐も加わりました。昭和一三年といえば、前年から「支那事変」が始まっており、四月に国家総動員法が公布され、七月に張鼓峰事件がありました。一〇月には武漢三鎮の占領で、東京中は提灯行列でわきかえったものであります。私はそのとき中学四年、初めて三宅坂の参謀本部に入りました。そういう思い出がありますけれども、一一月三日には、東亜新秩序建設の近衛声明があった年であります。

この一一月二五日の陸海軍軍務局の中堅層の意見交換から、高木は、陸軍は「支那事変」解決の意志はなく、「支那事変」と平行して独伊と通謀して対ソ戦の強い意図を秘め、対ソ軍備の優先を主張しているという強い印象を受けたのであります。高木は、海軍の政治力にはこの陸軍の強烈な意図を阻止する力はない、高木の観測によれば、海軍の政治力はせいぜい陸軍の三割から四割、将校の数だけでもおそらく二割弱で、これでは陸軍の独

懇談会メンバー

一、思想懇談会

安倍能成（一高校長）　岸田国士（劇作家）　関口　泰（朝日論説）　谷川徹三（幹事・法大教授）
富塚　清（東大教授）　服部静夫（東大教授）　藤田嗣雄（東大）　和辻哲郎（東大教授）

二、外交懇談会

伊藤正徳（時事新報）　稲畑勝治　神川彦松（東大教授）　三枝茂智（幹事・明大教授）　斎藤忠　高木八尺（やさか）（東大教授）　田村幸策　松下正寿（立大教授）

三、政治懇談会

岸本誠二郎　佐々弘雄（朝日論説）　杉原荒太（外務省）　田中慎次郎（朝日論説）　田中二郎（東大助教授）　細川護貞　矢部貞治（幹事・東大教授）　湯川盛夫（外務省）

四、総合研究会

板垣与一（東京商大教授）　大河内一男（東大助教授）　三枝茂智　高山岩男（京大教授）　谷川徹三　武村忠雄（慶大教授）　永田　清（慶大教授）　矢部貞治

五、直接連絡の嘱託（海大講師を含む）

天川　勇　江沢譲爾（東京商大助教授）大熊信行（高岡高商教授）大串兎代夫　加田哲二（慶大教授）清水　澄（東大）清水幾太郎　杉村章三郎（東大助教授）高木友三郎（明大教授）溜島武雄　田中耕太郎（東大教授）田中精一　谷口吉彦　中山伊知郎（東京商大教授）本位田祥男　穂積重遠（東大教授）安岡正篤　蠟山政道（東大）（注、溜島嘱託は海軍省顧問秘書）

六、海軍省顧問（司政長官を含む）

井上庚二郎　岡田文秀　竹内可吉　藤原銀次郎　藤山愛一郎　松江春次　山崎　巌

なお東竜太郎、湯川盛夫その他多くの人々が司政官として第一線に赴任された。

高木惣吉『太平洋戦争と陸海軍の抗争』（経済往来社、昭和四二年）所収

走を防ぎきれない。陸軍に対抗するためには、海軍に民間の良識を結集し、学者知識人の率直な意見を聞くとともに、海軍の意志や内情も理解してもらい、さらにこれらの人々の助力で劣勢な海軍の政治的影響力を補強してもらいたいという希望もあって、ブレーントラストの編成に取り組んだのであります。

すでに昭和一四年一一月、当時は海軍大学校教官であった高木大佐は、海軍大学校研究部に初めてグループを発足させましたが、それはまだ小規模のものでありました。高木が本格的にブレーントラストの編成に取り組んだのは昭和一五年からであります。その選考過程において、このブレーントラストの中心的存在となるにいたった東京帝国大学法学部の矢部貞治教授、政治学担当、当時三七才でありましたが、矢部教授との結びつきが始まりました。『矢部貞治日記』によりますと、昭和一五年五月八日に矢部さんのところに話があったということであります。

いろいろ人選の結果、昭和一五年一一月二度目の調査課長になった高木大佐が上申書用に編成した、つまり次官の承認を得て機密費をもらわなくてはなりませんので、そういう上申書用に一応編成したブレーントラストが、別掲の懇談会メンバーであります。後から追加変更したものはあります。懇談会メンバー、これは見ていると面白いことが出てくるのであります。思想懇談会の中には、安倍能成一高校長、和辻哲郎東大教授も入っております。幹事は谷川徹三です。あと外交懇談会、政治懇談会、総合研究会ときて直接連絡の嘱託、穂積重遠、蠟山政道、いずれも海軍嘱託でありました。ここに京大のグループは入っておりません。これはまた後で述べます。

今私がこのメンバーは見ていると面白いと言いましたのは、外交懇談会のところに斎藤

忠、それから直接連絡の嘱託のところに大串兎代夫が入っておりますが、これは意外です。この懇談会メンバーは、高木大佐がいろいろの人にも頼みましたけれども、ほぼ独力で作りました。高木大佐はブレーンの選考には思想傾向はほとんど問題にせず、むしろいろいろの意見が出ることの方が望ましいというので、意外な人が入っています。まず一人あげれば、斎藤忠であります。斎藤忠は、昭和一六年に結成された新日本世紀社の一員で、これは参謀本部から一〇万円の資金をもらっている言論統制のための御用機関であります。後で出てきます斎藤晌、大串兎代夫、これらの連中も入っておりまして、昭和一七年一二月に大日本言論報国会ができたときに、これに加わり、斎藤忠はその大日本言論報国会の専務理事になりました。

昭和一七年一二月二四日、ちょうど大日本言論報国会ができたあとの矢部日記をみますと、最近言論報国会というものができて半分狂気のような連中が幹事顔を並べている、と記されております。さらに矢部日記によると、この斎藤忠は外交懇談会で、高木八尺、田村幸策と激論をやりまして、田村などは席を蹴って立つというほどで、また斎藤忠はほかの思想懇談会の和辻哲郎も非難しているということで、大変な者を入れているわけであります。はじめ作ったときにはおそらくそこまでとは思わなかったのでありましょうが、そういうわけで、この懇談会のメンバーというのはなかなか面白いものであります。

すでに多少文献をあげましたけれども、なお若干話しておきますと、最近刊行されたばかりで、本日の話にも利用した『高木惣吉　日記と情報』（編者代表、伊藤隆）、これは上下両巻で二段組千ページを超えるものであります。平成一二年七月にみすず書房から発行されておりますが、私は全部読みました。これは非常に面白いものでありまして、海軍のブレーントラストに関してのみならず、昭和一〇年代の日本の軍部を中心とした政治の中枢の動向に関する貴重な資料であります。上巻は昭和一二年から昭和一五年まで、下巻は昭和一六年から昭和二〇年までで、要するに昭和一二年から昭和二〇年にかけまして、日記ばかりではない情報が記されております。高木惣吉は調査課長でもありましたから、極秘の情報をメモしており、それがこのたび『高木惣吉　日記と情報』として印刷されたわけであります。これは、本来の日記と膨大なメモ、その中には国家機密、軍の極秘を含むもので、非常に貴重な資料であります。後でまた、この中で従来の文献には出ていないことを、取り上げます。

『高木惣吉日記』というのもありまして、昭和六〇年三月に毎日新聞社から出ました。これは実は原稿用紙に本人の手で清書されたもので、日記の原本ではないのです。しかも、昭和一四年、一八年、一九年の一部であります。毎日新聞社の『高木惣吉日記』の解説は鈴木成高さんであります。その関係については後で述べる機会があります。

ほかに藤岡泰周の『海軍少将高木惣吉』、副題が「海軍省調査課と民間人頭脳集団」で、これは昭和六一年に光人社から出ております。この藤岡泰周という人は、大正六年に生まれ、東大法学部を卒業し、戦時中短期現役の主計科士官として海軍省調査課に在勤して高木に関心をもっていましたので、この本は、よく聞き書きをした、なかなか面白い本であります。大体海軍省調査課というのは大臣、次官に直属して調査、特命事務を担当する課で、実質的な仕事は大臣の国会答弁資料の収集作成が主体でありました。高木はこの調査課に大学卒業の短期現役を多く用いております。それは一つには人材の温存確保、つまり前線に出せないように人材を温存して確保しておく、また戦後も視野の中に入れて、人材の温存確保をはかったわけであります。

それからすでに述べました『矢部貞治日記』、これは全四巻ありますが特に「銀杏の巻」で、昭和一二年から昭和二〇年にかけましての日記、これも二段組八七六ページ、もちろん私は全部読みました。これは昭和四九年に読売新聞社から出ております。矢部教授は海軍のブレーン組織の中心的存在であります。そういうわけで、『矢部貞治日記』、これは非常に面白い、大変重要な資料であります。

『南原繁回顧録』、詳しくは『聞き書　南原繁回顧録』というのが平成元年に東大出版会から出ており、なかなか面白いものであります。これは主として丸山真男、福田歓一と

の対談で、その中で丸山さんが、「矢部先生の主観的動機は何とかして陸軍の力を押さえようという点で一貫しておられた、やっぱり悲劇的ですね、その意味でも『矢部貞治日記』は非常に面白い資料です」と南原さんに話しかけております。南原さんがそれに答えて「そうですか、深入りしすぎたのでしょうね」と言っております。この『南原繁回顧録』で丸山真男さんが言っている言葉は、大変象徴的でありますが、これはまた後で述べます。南原さん自身は、自分の書いたものの中で一番長く残るものは歌集『形相』であると言っており、回顧録の中でもしばしば引用されております。『形相』は今は岩波文庫に入っており、歴史を勉強している者にとりましても、なかなか面白い歌集であると思います。

伊藤隆『昭和十年代史断章』、これは昭和五六年に東大出版会から出されたものでありますが、『矢部貞治日記』の「銀杏の巻」を中心にした昭和五〇・五一年度の東大の講義であります。伊藤隆はすでに退官しましたが、東大文学部教授でありました。これは『矢部貞治日記』をもとにしておりますので、この中には矢部日記がよく抜き書きしてあります。この矢部日記の昭和一八年五月二八日のところに、文学部の金子助教授が京都の連中から頼まれたとして『世界史的立場と日本』を持参してくれた、と記され、また六月六日夜、京都の四人からもらった『世界史的立場と日本』を拾い読みする、なかなか面白い、

さすがに俊英のグループだという気がする、非常に僕の考えと似たところがあるのを発見する、という記載があります。矢部さんと京都学派の接触、なかに西田幾多郎の女婿の倫理学の金子武蔵さんが入っているということで、これもまた面白い。矢部さんと京都学派の接触は後でまた述べます。

話を懇談会にもどしますと、高木によると懇談会を思想、外交などに分けたのは申請上の形式であります。次官の承認を得て機密費を引き出さなくてはならないので、形式を整えるためと、グループに分けた方が能率的と考えたからで、各懇談会に幹事をおいて中間のまとめ役を頼み、総合研究会で結論的なものがあれば案文にまとめ上げる、そういう構想でありました。各懇談会は自由に戦略を批判し、海軍が結論や方向を希望したり、注文したのではなかった、もちろん、海軍が緊急と感じたテーマについて、研究を頼んだことはしばしばあった、と高木は運営の考え方について述べております。

京都学派は地域的考慮もありまして、この組織とは別個の扱いでありました。高山岩男のみが総合研究会に入っております。これは連絡役でありまして、むしろ京大グループのメンバーは同じ京大でありますから、よき交流の場となり、それぞれの研究活動に非常に有意義なものとなったようで、同じ海軍のブレーンという関係ではありますが、東京の懇談会とはかなりおもむきを異にした結びつきでありました。先に述べました外交懇談会の

激論というようなことはありません。

陸軍の「秋丸機関」

このような海軍のブレーン組織は、陸軍のいわゆる「秋丸機関」、これとは大いに異なるところがあります。これはこれで大変面白い問題でありますけれども、時間の関係もありますので、ここでは一言だけ述べておきます。秋丸機関というのは秋丸次朗主計中佐を班長としまして、有沢広巳、これは昭和一三年二月、東大経済学部助教授のとき、第二次人民戦線事件、教授グループ事件として大内兵衛、脇村義太郎、美濃部亮吉らとともに検挙されて保釈中の身でありましたが、この有沢広巳も参加した陸軍省戦争経済研究班であります。これと海軍のブレーン組織を比較するときに、学者知識人に対する海軍と陸軍の態度の相違が明らかとなります。

この秋丸機関につきましては、有沢広巳が「我が思い出の記」を連載していた毎日新聞社の『エコノミスト』誌上に昭和三一年七月、「軍国主義の旗のもとで」という表題のもとに、「支離滅裂の秋丸機関」という見出しで、有沢さん自身の思い出を記しております。

それから、平成五年一月号の『学士会会報』に「学者と戦争—有沢先生を偲んで」という脇村義太郎の一文があります。実はもともと、私がこの秋丸機関を初めて知ったのはこ

の『学士会会報』であります。また、脇村さんは、平成三年九月『回想九十年』、平成五年一二月『続回想九十年』と二冊岩波から出しておりますが、その『続回想九十年』の方に「秋丸機関」というのが収められております。この二冊とも私も読みましたけれども、こういうことを離れても、脇村義太郎さんというのは、これは非常に面白い人です。三高の先輩ですが、この人は世界中のバランスシートを集めてそれを分析して、そして石油・海運が専門でありますから、実務能力抜群であります。戦時中も教授グループ事件に巻き込まれたけれども、さすがに外務省が嘱託として登用したほどの人材であります。

実は、脇村さんは、秋丸次朗自身が出演した平成三年一二月三日NHK教育テレビの日米開戦記念特別番組、「新発見・秋丸機関報告書・有沢広巳と太平洋戦争」に出演しましたので、その番組の解説を兼ねて『学士会会報』の一文を書いたわけであります。この脇村さんの『学士会会報』の一文のあと、産経新聞社の『正論』の平成五年九月号に、秋丸次朗の実弟の朝稲又次（あさいなまたじ）という人が「東条英機に諫言した秋丸機関と有沢広巳」という一文を出しております。これが出たために、再び『続回想九十年』で「秋丸機関」について述べているわけであります。これはこれで、大変興味深い問題でありますけれども、今は時間の関係で一言だけ申しておきます。

昭和一六年七月一日、杉山参謀総長の前で秋丸中佐が単独で、秋丸機関の各報告書を全

部集めまして、総合研究報告をいたしました。報告書は有沢報告書のほかにももちろんあります。今は詳しく述べることはできませんが、有沢は英米班の担当でありました。有沢のほかにもスタッフはおります。しかし、秋丸機関の報告書全体は、後で述べます事情で今日残っておりません。ただ有沢報告書の一冊がその没後に発見されましたので、それがテレビで放映された次第であります。

有沢報告書の結論、すなわち開戦すれば一・二年のうちに日本と英米の経済戦争力は一対二〇の差となり、戦力は低下するという結論、これは戦争はできないということです。開戦は慎重にという結論になるわけでありますが、こういう報告を秋丸中佐が参謀総長以下部課長たちの前でいたしました。これはテレビで秋丸さん自身が言っていることでありますが、参謀本部の連中は居眠りをしておる、聞いてはおらん、こう言っておりました。この報告は杉山参謀総長の判定で、国策つまり対米英戦に反するという判定で、秋丸機関の報告書は全部、破棄焼却されたわけであります。それでありますから、秋丸機関の報告書全体は残っていないのです。秋丸機関は昭和一六年八月一日解散し、秋丸中佐はフィリピンに転出を命ぜられ、レイテ島の第一六師団の経理部長（主計大佐）にとばされてしまいました。

大体情報というのは、たとえ正確な情報がありましても、それを使う人が悪ければ駄目

であります。一つだけ言っておきますと、あの開戦の二週間前にモスクワ駐在武官の山岡道武少将が、参謀本部にあてて、いまやドイツ軍はモスクワ前面において敗走しつつある、このようなドイツと組んで米英に宣戦するごときは言語道断である、という旨の電報を打ったのです。ところがそれが東条の怒りにふれて、山岡少将は伊豆大島の守備司令官にとばされてしまいました。使う人が悪ければ、いくら正確な情報がありましても駄目、ということの典型的な例は、この秋丸機関もそうであります。

海軍と京都学派

話を本筋にもどしまして、海軍と京都学派の関係についてさらに話を進めてまいります。高木惣吉は、海軍兵学校同期の親友有馬正文に勧められて、初級士官当時西田幾多郎の『善の研究』（明治四四年刊行）に取り組んで以来、西田哲学に深く傾倒しておりましたが、昭和一四年二月、大磯の原田熊雄（西園寺公望（きんもち）の秘書）別邸におきまして、念願かなって初めて西田に対面いたしました。高木は茅ヶ崎在住で、大磯の原田熊雄とは電車の中でしばしば会うので、親しい間柄でありました。

そのあと同年九月、高木は単独で鎌倉に西田を訪問して親しく教えを乞い、海軍への協力を要請したところ西田は快諾し、今は田辺元教授が中心であるから、順序としてまず田

辺教授に納得してもらう必要があること、また連絡係としては高山岩男助教授（当時田辺のもとで哲学・哲学史第一講座の助教授）が適任であることを示唆しました。これが海軍省調査課と京大グループとの連携の出発点でありました。このたび刊行された『高木惣吉日記と情報』には従来の文献には記載されていない、このあと昭和一六年一一月二六日の京都学派の座談会にいたるまでの高木と西田および京都学派との交流の記載があり、初めて私も知ったことで甚だ興味深いものがありますので、以下手短に挙げておきます。

まず昭和一六年九月七日、大磯原田男爵別荘にて西田博士と「世界史ノ改訂問題、時局問題ニツキ雑談」、とあります。前日の九月六日は御前会議で、戦争準備完了の目標を一〇月下旬とし、実質的に対米戦を決定しております。「絶対極秘」で「御前会議概況」の高木のメモがありますから、高木は当然これを知っております。

昭和一六年九月一一日、鎌倉の西田先生を訪問、谷川徹三、和辻哲郎両氏も一緒、谷川徹三は思想懇談会の幹事、谷川さんと和辻さんとは仲がいいということでありますから、この二人よく一緒になります。そこで「国家理念、世界史構成、世界史更訂」などにつき話し込む、つまり世界史の問題が話題になっております。昭和一六年九月三〇日、上京中の高山岩男氏と懇談して、一〇月七日には学士会館にて和辻、谷川両氏と話しております。

こういうわけで、昭和一六年一一月四日、いよいよ座談会のその月でありますが、「午

前谷川徹三氏来訪、高山、鈴木両氏ニ世界史書換ヘノ件依頼ニ付協議」、谷川さんと高山岩男、鈴木成高両氏に世界史の書き換えを依頼することについて協議しております。ちょうどこのころ、高山さんは昭和一七年九月に岩波から出版した『世界史の哲学』を構成する諸論文を岩波の『思想』などに発表していたときであります。鈴木さんは『ランケと世界史学』を昭和一四年に弘文堂の教養文庫から出版しておりました。『世界史の哲学』、あれは私が東大に入りまして、東大の前の本屋で売り出していましたが買えない、手が届かない棚の上に置いてある、くじ引きで当たった者にしか買えないというので、あの当時は買えなかったのです。今は古本で持っています。

昭和一六年一一月二三日、京都帝国大学を表敬訪問、これも私は初めて知りました。あのとき私は三高の二年でありましたが、こういうことがあったとは知る由もありません。表敬訪問して文学部の有志教授・助教授の対海軍協力を感謝し、講演を行ないました。都ホテルのメモ用紙に高木がペン書きした講演の覚え書きが残されておりまして、それがこのたびの『日記と情報』に印刷されておりますが、そのペン書きの覚え書きの最後に、「指導者ニ新世界観ヲ与ヘヨ、指導者ニ世界観ヲ与フルモノハ思想人ナラザルベカラズ」とありまして、この高木の講演は軍部の独走について反省し、特に思想教育の重要性に論及して好評を博した、ということであります。

翌一一月二四日、京大グループ関係の人々とだけさらに一席設けられまして、鈴木さんもその席に出た一人でありますが、そのときの鈴木さんの感想を、先にあげた藤岡泰周氏が『海軍少将高木惣吉』に聞き書きしております。それによると、鈴木さんのはっきりと記憶に残る高木の談話は、まず支那事変の不始末は許すべからざるものである、と支那事変批判、陸軍批判を鋭い語調で述べたことであり、また世界の指導者は背後に哲学と思想をもっているが、日本の指導者にはそれがない、独りよがりの皇国史観でなく、客観性をもつ世界史観を教えて頂きたいと高木さんが述べた、ということでありました。鈴木さんは、高木大佐から受けた初対面の印象は、軍人にありがちな大言壮語は一語もなく、態度は謹厳かつ丁重で一種沈鬱の風があった、と言っております。高木大佐も終生歴史学者鈴木さんに深く傾倒しまして、息子の成（あきら）の歴史学者としての指導を託したのもその故でありました。高木成は早稲田大学史学科を卒業いたしまして、指導教授はもちろん鈴木成高さんであります。アメリカ史を専攻して、のちに鈴木さんが理事をしている東海大学の教授になりましたが、すでに亡くなりました。それでありますから、高木惣吉ならびに息子の成とは、鈴木さんは非常に親しい。そこで『高木惣吉日記』（毎日新聞社）の解説は鈴木さんが書いているわけであります。このようにしましてその二日後、昭和一六年一一月二六日、鈴木さんを含む京都学派によって、あの座談会「世界史的立場と日本」が行なわれ

たわけであります。

座談会の基調

以上のように見てくれれば、座談会の基調はおのずから明らかであります。そもそもこの座談会が『中央公論』に掲載されたのは、大島さんの言うところによれば、海軍省調査課が、京都学派の座談会にぜひスペースを割いてほしいと『中央公論』に交渉して、『中央公論』が承諾したからであります。実は海軍省調査課の懇談会メンバーの編成表には出ておりませんけれども、「太平洋研究会」と称された、主として『中央公論』、『改造』、『日本評論』、『文藝春秋』の四大総合雑誌の編集長と調査課との懇談会があり、『中央公論』は、その「太平洋研究会」の一員で、京都学派の座談会掲載は、陸軍に対する『中央公論』の抵抗の一面でありました。それでありますから、陸軍は京都学派と『中央公論』を目の敵にしたのであります。のちに昭和一九年一月、『中央公論』、『改造』等の編集長は検挙されました。いわゆる「横浜事件」でありまして、同年七月、『中央公論』、『改造』に廃刊命令が出ます。当時の『中央公論』編集長黒田秀俊の『横浜事件』（学芸書林、昭和五〇年）という本があります。これのコピーは本日出席している梅田君の好意によるものですが、この第一章が「海軍と京都学派と『中央公論』」で、『中央公論』側の意図がよ

くわかります。

このような次第で、座談会の基調は陸軍に対する批判牽制でありますが、それを直接に表明せず、大島さんも言うように、それが出てくる源泉として、一つの歴史哲学的立場を打ち出そうとしたということであります。この座談会が開戦直前の一一月二六日に行なわれたにもかかわらず、そこで主張された基本的立場が開戦後も維持されて、その後の第二回、第三回の座談会と合本した単行本の表題も『世界史的立場と日本』となっていることは、それがこの三回にわたる座談会を貫く基調でもあったことを示しております。そのことはこの本の序文にも記されております。つまり、これらの座談会は戦争をあとから追いかけて礼賛したものではなく、始めに一つの基本的立場があって、戦争をその方向に導こうとするものであったのであります。その意味におきましても、私はこの一連の座談会のうち、第一回の座談会が最も注目すべきものであると考えますので、本日は特にこの座談会を簡潔に取り上げておきます。第二回は東亜共栄圏の問題、第三回は総力戦の問題で、これはいずれも現実の問題であります。

第一回のテーマは「世界史」であります。これは書斎の学者、つまり哲学、歴史学のような学者にとりましては最もふさわしいテーマであります。第一、京都で哲学者、歴史家、あるいは宗教学者は静かな書斎で、ふだん論文・著書を読んでいるわけであります。あの

ころテレビはもちろんありません。しかも三〇代の半ば四〇代に入ったばかりのちょうど研究盛りの学者であります。ふだんはそうして専門の洋書を読んでいる。現実の問題、東亜共栄圏や総力戦の現実問題は、分かるわけがない。これは脇村義太郎さんのような、バランスシートも読めて、石油、海運が専門というような人ならいざ知らず、京都の静かな書斎で、ふだん洋書を読んでいる哲学者や歴史学者に東亜共栄圏や総力戦の問題は分かるわけがありません。それですから、次第に座談会は空論になってくるのです。私はその中で一番面白いのは第一回の座談会で、これはこの人たちに最もふさわしいテーマの座談会であると思います。第一回座談会は京都学派がふだん読んでいる洋書が数多く出てくるので、別掲の目次を見ただけで分かりますように、時局的発言もありますが、意外に学問的なのです。

それに先に述べましたように、京大グループは仲間うちでありますから、仲間うちのよき交流の場となり、戦前ということもありまして、知的交流を楽しんでおります。この第一回の座談会は、なにかにつけ「一同哄笑」、大笑いなのです。ところが第二回、第三回の座談会になりますと、第三回あたりで一同笑うというのがありますけれども、これは何かというと、鈴木さんが自分はこういうことを言ってある先生に叱られた、と言って一同笑った。それはある先生というのは西田幾多郎さんで、こういうことを西田さんに話して

世界史的立場と日本（座談會）

☆ 世界史が問題となる理由
☆ 世界史の哲學と世界史學
☆ ヨーロッパ人の危機意識と日本人の世界史意識
☆ ヨーロッパに於けるヨーロッパの統一性の反省
☆ ヨーロッパ人の優越意識
☆ ヨーロッパ文明の特質
☆ 日本には近代が二つあるといふこと
☆ 東洋の歴史の觀念
☆ 発展段階説の批判
☆ 機械文明の問題
☆ 歴史主義の問題
☆ 個體意識の問題
☆ 西洋のルネッサンスと近世史
☆ 歴史主義と國史教育の問題
☆ 國史を世界史的觀點から見ること
☆ 世界史的思考法
☆ 哲學と現實
☆ 世界史とモラル
☆ 種族・民族・國民
☆ 都市の問題
☆ アメリカ論
☆ 現代日本と世界

高坂正顯
鈴木成高
高山岩男
西谷啓治

十一月二十六日夜
於京都圓山左阿彌

『中央公論』新年号（第五十七年第一号第六百五十三号）一五〇ページ
（昭和十六年十二月二十三日印刷、昭和十七年一月一日発行）発売昭和一六・一二・一九

叱られたというところで一同笑った。その程度であります。哄笑とかそういうものはありません。第一回だけは哄笑が多いのです。

ふだん読んでいる洋書の一例として、鈴木さんの冒頭の発言の最後のところに、一方にはトレルチあたりの「歴史主義の克服」というような学問的理由もあるだろうけれども、と言っておりますが、これは『歴史主義とその諸問題』というドイツ語の原書に関するもので、これを当時読んでいるものは極めて限られております。一口で言われても普通の者には分かりません。もちろん、三高生のとき私も本当のところは分かっておりません。そのほか鈴木さんの講義を聴いた三高生ならば知っているクリストファー・ドーソン、目次に「ヨーロッパの統一性の反省」というところがありますが、「ヨーロッパの統一」というのはクリストファー・ドーソンです。それから、「発展段階説の批判」が出てくる。これはドプシュであります。それから、「西洋のルネサンスと近世史」、そこでは世界史三分法の問題も出てきます。我々もよく聞きました。それからルネサンスの問題、そこでブルダッハ、ジルソン、またホイジンガという名前が出てきます。私どもは、三高の西洋史の講義でドプシュ、ブルダッハ、ジルソン、ホイジンガなどという名前を聞きました。あの当時知っていたのは名前だけであったにしても、鈴木さんの三高西洋史の講義は、当時の水準では抜群のものであります。しかもこの座談会におきましては、このところで鈴木さ

んはブルダッハを担ぐ、西谷さんはジルソンを担いで、ルネサンスの起源をめぐる論争をやっているわけであります。時局とは何の関係もない、そういうルネサンスの起源をめぐる論争で一方はブルダッハを担ぎ、他方はジルソンを担ぐ。私はもちろん後年になって、読みましたから分かりますけれども、このときにブルダッハとかジルソンとか言われたところで、普通の者に分かるわけがない。つまり、これ意外に学問的なのです。

時局的な発言はもちろんあります。ありますけれども、目次を見ただけでも分かりますように、意外に学問的なのです。それからまた、これも意外な発言でありますけれども、「世界史的思考法」のところで、西谷さんが本当の歴史的な思考を養うのには、ヨーロッパの歴史が一番、と言っております。西谷さんによると、ヨーロッパだとドイツ史とか英国史とかのほかにヨーロッパ史というものがある、つまり、ヨーロッパ的な世界史、同様に、当時の用語で言いますと、日本や三韓や支那などの全体を一つの世界とした東亜的な世界史、そういう「世界」の歴史が、歴史的な思考を養う一番大切なものである、と西谷さんは言っております。こういう諸世界の世界史という見方は、一九世紀の歴史家ランケに起源をもつものであります。岩波文庫のランケの『世界史概観』、鈴木成高、相原信作共訳で昭和一六年一二月一五日発行となっております。原題名は『近世史の諸時代について』でありますが、『世界史概観』という題名で出ております。この『世界史概観』は、

ちょうど私どもが三高三年になった昭和一七年四月、鈴木さんは教科書としてこれを用いました。これにコメントを付けていくという授業でありましたが、間もなく病気で倒れ、西洋史は井上智勇さんと中山治一さんの二人の分担になったわけであります。それでありますから、これも大変懐かしい。ところがランケの場合はまだヨーロッパを中心とするものであります。この座談会でいう「世界史」とは、ヨーロッパ中心の世界史に対してヨーロッパ世界をも相対的な個別世界とみなす、諸世界の世界史という見方のことであります。

この座談会の中で面白い発言としまして、「国史教育の問題」、そこでの鈴木さんの発言、「今年」というとこれは昭和一六年になります。今年の三高の入学試験で、国史八五点、だが、外国語、数学、物理などを合計した点が満点五〇〇点に対して僅かに七〇点ばかり、国史尊重も結構だが国史一本槍になると、こんなのが秀才として入ってくることになる、とこう言っています。私どもは昭和一五年の入学試験で、各高等学校が別個の問題を出す最後の年でありますから、私どもの国史の試験は中村直勝さんですが、高等学校は昭和一六年から文部省の統一試験であります。西谷さんの発言は、日本歴史にばかり力こぶを入れる教育方針は、悪くすると井の中の蛙ばかり作ることになる、というのです。こういうところで京都学派が攻撃目標になったわけであります。

このような京都学派の世界史的立場の学問的遺産が、昭和四〇年五月から刊行された、

京都大学史学科を中心とする『世界歴史』全七巻（人文書院）であります。この『世界歴史』は、在来のヨーロッパ、とりわけ西ヨーロッパ中心の単線的発展の体系に基づく世界史への反省から、オリエント・地中海世界、東アジア世界、ヨーロッパ世界など幾つかの「歴史的世界」を設定しまして、それぞれの世界の発展・連関を中核として、全地球的な「世界史」を構成しようと試みたものであります。それはかつての京都学派の「世界史的立場」に通ずるものと言えます。

「世界史の哲学」につきましては、昨年六月の十八日会の古田光君の「京都学派の哲学」再考を参照して下さい。本日の私のテーマは海軍・京都学派・世界史であります。この京都学派の単行本『世界史的立場と日本』は、冒頭に述べましたように昭和一八年三月出版されるや大きな反響を呼び、たちまち初版、再版売り切れましたが、昭和一九年に入って陸軍の意向を受けた日本出版会の圧力で、増刷はできなくなりました。当時は、奥付に出版会承認何々号と入っているわけです。そもそも昭和一七年一月号の『中央公論』に掲載された第一回の座談会以来、京都学派は批判の対象となっておりました。排撃の理由は国史を離れた西欧流の考え方で、国体観念に欠けるということでありました。昭和一八年に入ってから、陸軍および精神右翼からの攻撃は激化いたしました。

この年三月に刊行された単行本『世界史的立場と日本』の序文にも、「我々の立場に日

本的主体性が欠如するとの批評」があることが述べられておりますが、それはその攻撃の一端を示しております。ここでは、陸軍および精神右翼からの攻撃について二つのエピソードを話しておきます。なお、これはいわゆる「国内思想戦」の問題で、先に述べましたように昭和一七年一二月に結成された大日本言論報国会の任務は、一言で言えば「国内思想戦」でありました。これにつきましては古田光君の「世界史の哲学」と「皇道哲学」、そのほかこの問題に触れたものがあります。要するに皇道哲学からみるならば、京都の哲学は西戎（せいじゅう）、西えびすの哲学である、というわけであります。

二つのエピソードとは何であるかと言いますと、一つは、昭和一八年八月六日の矢部貞治さんの日記にこう書いてあります。鈴木成高氏から速達で、一高の日高第四郎氏から言ってきたことだが、「斎藤晌らが京都学派を反戦論者として告発する用意をしている」と伝えてきたと。斎藤晌は、先に述べた斎藤忠の一派で「皇道哲学」派であります。その斎藤晌らが京都学派を反戦論者として告発する用意をしていると、こう鈴木成高さんが矢部さんに伝えてきたので、矢部さんは早速調査課に連絡して、この問題は調査課から、これは矢部さんの日記にある言葉通りに言うならば、「京都学派の背後に海軍のあることを明らかにすること」として、結局海軍から陸軍に交渉して、いろいろ細かい経緯は矢部日記に書いてありますが、決着がついたものであります。

いま一つは、昭和二〇年の春、大津市での滋賀県中等学校配属将校の会合において、京都師団から派遣されたある高級将校が、敵の空襲によって国内が混乱に陥った場合を想定し、そのさい竹槍をもって「処置」すべき対象として第一に朝鮮人、第二に米英の捕虜、第三に京都学派をあげたということであります。これは伝える者によって多少の記憶の違いがありますけれども、竹槍をもって突き殺すべき対象として、京都学派があげられているということは確かであります。

終わりに

以上要するに京都学派の意図は、中山治一さんも先にあげた『自由』の座談会で言うように、「中へ入ってよくするということが一番基本的な姿勢」でありました。これは『中央公論』の黒田秀俊によりましても、『中央公論』も戦争の枠組みの中での抵抗、「受動的抵抗」、「理性防衛の抵抗」でありました。その点では京都学派と一致し、『中央公論』が京都学派の座談会、論文を掲載したわけであります。

その意味においては、海軍のブレーン組織の中心的存在であった矢部貞治さんに対する、先にも述べました『南原繁回顧録』の中での丸山真男さんの言葉が象徴的であります。矢部さんは、近衛文麿の新体制運動のブレーンでありましたが、丸山さんが、「矢部先生は

海軍にも関係されていた。先生の主観的動機は何とかして陸軍の力を押さえようという点で一貫しておられた。やっぱり悲劇的ですね」、こう南原さんに言っている。この言葉は非常に象徴的であります。

京都学派は、戦時中は陸軍と右翼から右頬を、戦後は進歩的知識人と左翼から左頬をたたかれ、両頬をたたかれて沈黙したまま舞台から去って行きました。それから二〇年経って目撃者によって、貴重な「隠されてきた歴史の証言」がなされ、爾来、当事者たちによっても、秘められた数々の証言がなされて今日にいたりました。

まだまだ話は尽きませんが、本年は三遊亭円朝没後百年であります。円朝にちなんだわけではありませんが、「海軍・京都学派・世界史」という三題噺、一応つながりましたので、これをもって私の話を終わります。

追記（二〇〇二年八月）

(1) 「大島メモ」については、この発表当時（二〇〇〇年一一月）私は所在を確認していなかったが、同年一一月五日、京都大学哲学科出身の大橋良介氏が、大島家で大島康正氏が保存していたメモ・ノート類を発見し、これを「大島メモ」と名付け、分類整理して、解題を付し、出版されている。大橋良介『京都学派と日本海軍―新史料「大島メモ」をめぐって』

（『ＰＨＰ新書』、二〇〇一年一二月）。ただし出版されている「会合メモ」は、昭和一七年二月一二日から昭和一八年一一月二日までのメモで、昭和一六年一一月二六日の座談会「世界史的立場と日本」のメモは収められていない。この「大島メモ」については、さらに二〇〇二年六月六日の『朝日新聞』に掲載された大橋良介氏の一文（封印された「体制内反体制」―「大島メモ」にみる京都学派と海軍）を参照。なお、大橋良介『西田哲学の世界』（筑摩書房、一九九五年）所収の（京都学派と「近代の超克」）を参照。

(2) 古田光氏の一九九九年六月の十八日会での「京都学派の哲学」再考は、『神陵文庫・紅萌抄』合本Ⅲ（二〇〇二年一月発行）に収められている。

（名古屋大学名誉教授）